

種 文
学 賞

令和四年
作品集
第一回目

上



令和四年最初の種文学賞は、次のお題で作品を募集しました。

小学二〜三年生の部 「すごい！」

小学四〜六年生の部 「はじまりの神話」

中学生の部 「はじまりの神話」 / 「地の文をつくろう2」

高校生の部 「『信』のつく熟語」 / 「現代語訳大賞」

ここでは、小学二〜三年生の部と、小学四〜六年生の部の全作品を紹介します。どれもすばらしい文章ですので、ぜひお楽しみください！

※ 筆者・作者名はペンネームで記してあります。学年は令和四年三月時点のものを記してあります。紹介の順番はペンネームのあいいうえお順になっています。

【小学二〜三年生の部 「すごい！」】

☆ 「すごい！」と思ったことを、二百字以上の文章で書くというお題です。二人が作品を出してくれて、その内の「梅」さんがこの部の最優秀作品にかがやきました。

筆者 梅 (小三)

親せきのすごいスキー



私がすごいと思ったことは、親せきのスキーのすべりです。その人は、おばあちゃんのお姉ちゃんのおすこさんです。年れいは、五十五才です。この前の冬休み親せき一同でスキー旅行に行きました。親せき全員でスキー旅行に行くのは、はじめてでした。だからその人のすべりをこのときはじめて見ました。

その人のすべりは、しせいも美しく、びゅんびゅん行っていました。それに急なところも上手に付けていました。すごかったです。

その人は、三年生のころにスキーを始めて、四十年以上やっています。教えるのもうまく、スキー学校の先生のしかくを持っています。その人のおかげで私もスキーが上達し、小学生までにジュニアの二級と一級が取れるといわれました。

私は、その人みたいになりたいと思います。私には、六人の年下のいとこがいます。中でも、一才ぐらいの女の子がいて、私がこれから先上手くなって、その子がようち園になったところに教えたいと思います。

筆者 くどうきょうたろう (小二)

てつぼう

みなさんは「すごい」と思ったことはありませんか？ ぼくはたくさんあります。今回はその内の二つをしようかいたします。

体育たいいくのてつぼうのじゅぎょうのときに、「自分の一番じぶん いちばんできるわざをしましょう。」と先生に言われました。みんなが前まえまわりをしましたが、みたにさんという女の子がだるままわりをしました。それも十六回かいれんぞくで回まわりました。それを「すごい」とぼくはおもいました。

そのみたにさんという子はてつぼうの名人とよばれています。みたにさんは、足かけまわりなどレベルたかの高いてつぼうのわざをできます。

みたにさんにくらべて、ぼくはてつぼうは、そんなにできないけれど、そのぼくでも自分で「すごい」とおもったことがあります。みたにさんがだるままわりを十六回れんぞくやったときのつぎの体育のてつぼうのじゅぎょうのときのことでした。ぼくが地ちきゅう回まわりをできたのです。いままでは、手がいたそうだなとおもって回れなかったのに、思い切きってやってみたらできました。その回れたときに、ぼくはとても晴はれやかなきもちになりました。

それくらい、こわかった地ちきゅうまわりがとてもたのしくおもえています。

【小学四〜六年生の部 「はじまりの神話」】

☆ このお題は、ものごとの起源（はじまり）の神話を手作りするというものです。日本をはじめさまざまな国で伝えられている起源神話にふれながら、それぞれが自分だけの神話をつくってくれました。みなさんそれぞれが本場にすばらしいかなりの力作を書いてくれましたが、今回は「とらなこ」さんの「地震の起源」が最優秀作品にかがやきました。

作者 オセロ（小四）

すいみんのはじまり

むかしの人々は、すいみんを取らなくても元気に生活できていた。しかし、あるとき天照大御神がどうくつの中にはいったきりですがたを見せなくなるというできごとが起こった。その間これはしめたと思ひ悪い神が戦い始めた。

天照大御神がどうくつにはいったからしだいに人々はさくもつがとれなくなった。そうすると人々はおながすいてしかたなくなった。

ある村にすいというしつかり者の男がいた。すいはつかれがたまったのでいつものとおりによこになった。しかしいつもとちがいその日は意識が遠くなくなって目をとじた。そうすると神の戦いの音がしなくなり、すいは「これはすごい。みんなに教えるぞ。」と言ひ家をとび出していった。そして

「みんな、家にもどってゆかによこになってみな。そうしたら音も聞こえなくなつてすつきりするぞ。」といい、家にかけもどっていった。それについで一人、二人、三人とみんな自分の家にもどっていった。じきにみんながね始めたのか村はね息の音しかない。

次の朝、すいが目を開くとつかれがなくなったのにきづいた。しかも、いつもより頭がさえているように感じた。すいと村の人々はどうやって神のあらそいをとめるかを考え始めた。まず、意見を出したのは村長のみんなであった。「ゆかに横になり目をとじたら意識が遠くなくなってしばらくして目を開

くどつかれがとれたしいつもより頭がさえたことを神につたえよう。そして同じようにしてもらい、目をひらいたあと、すっきりしたじょうたいで話し合いをしてもらおう。」みんなはそういった。すいは「みんなさんとおれが争いをとめにいく」といい、二人はさっそくたびじたくをはじめた。そして村人たちは「がんばって」と口ぐちにいつてすいとみんなは光の道をわたりだした。

光の道とは神の世界と人間の世界をつなげる道のことだ。しかし、どこにつながっているかはわからない。だから、二人はしんちょうに道をわたっていった。たどりついたのは木のおいしげった森であった。すいは「ちっ、先が見えにくいな。」と舌打ちをした。みんなは木にのぼって道をかくにんした。すると、二人が立っているのは、なんと、やまたのおろちの背中であることがわかった。みんなは、「すい注意しろ、この森はやまたのおろちの背中だ。」とつよく注意をよびかけた。すいは「もうにげたほうがいい。はやくみんなさんその木からおりてきて。」といて二人は背中から地面へおりていった。

その先は神たちの争いの世界だった。二人は大きな声で「みなさん、聞いてください。いっかい争いをやめてよこになって目をとじてみてください。そして目をあけたら争いについて話し合ってください。」という、言うとおりにしてもらえた。つかれたから二人も目をとじた。やがて二人が目を開けたときには、もう話し合いがおわっていて争いをやめるということになっていた。そして、国は平和になり天照大御神が出てきて、作物がそだつようになっていった。

すいとみんなが国をすくったからゆかに横になり目をとじて体を休める動作をすいみんなとよぶことになった。

作者 かずま (小四)

日記のはじまり

昔、人間は脳がとてもすぐれていました。だから、一度習ったことは、すべて覚えてしまうのです。だから昔テストはなかったのです。

ある所に、神様の城がありました。そこには人間をうみだす神様、その人間にのうりよくをあたえる神様、感じようをあたえる神様がいました。神様の城は人間ではいけない遠い所でした。

ある時、科学にきょうみをもった少年がいました。その少年は、うまく工作ができなかったので神様に工作がうまくなるのうりよくをもらうためにおこづかいをため、すぐくうでのいいしょくにんをやとしました。

それから一年たって神様の城にいくための動そうちをつくりました。なぜかというところまで地球の直径の三倍だから歩いてダメだし、ジェットパックでもねん料が切れるから行けないのです。しかし、ワープすればいけるかもと思ってい動そうちをつくりました。ためしにとなり村までワープしました。するとちゃんととなり村まで行けたので、神様の城までひとつび、気付くとそこは、神様の城の前でした。少年は力いっぱい門を開けました。その城の中はめいろになっていました。その少年はがんばってそのめいろをとっばしました。めいろが終わった所には、三柱の神様がいました。

その神様たちの身長は少年と同じぐらいで、着ている服は人間が着ているふつうの服でした。さっそく少年は神様に「あなたたちは神様ですか？」ときくと神様はおどろいていました。すると一柱の神様が、

「なんのようだ少年？」

とききました。少年がここにきたわけを話すと、神様はおこって

「なんだ人間ごときがえらそうに。こらしめてやるうー！」

と言って世界中の人間の知力を下げてしまったのです。

それから三千年間、人間は知力を下げられたからずっと習ったことを覚えられないし、毎日、家が火事になります。火を消したいのに水をかけずに小枝をあつめて火にかけてしまうのです。それで、火が大きくなり、家もえていることをけい験しても、何度も同じあやまちをくり返しているので

す。

そのころ、ある所にニッキーという男の子がいました。ある日、歌を聞いて感動したからわすれないように牛の皮に書きました。そしてニッキーは感動したことを牛の皮に書くときめました。

その牛の皮がいっぱいになったとき、ニッキーの母が

「それはいいことよ。それを毎日書いたらどう？」

と言いました。その記録した皮は作った人の名前がニッキーなので、日記と名づけられました。それで人間は覚えることはできないけれども日記を書くことで復習ができるようになりました。それから世の中がどんどんよくなっていき、もう二度と火事が起きませんでした。しかし、と中にぼくがいやーなテストもできました。

作者 工藤隆太郎 (小五)

台風のはじまり

昔、地球のはるか上に、神さまの住んでいる台がありました。ちょうどその真下に、地球で一か所だけの天気をあやつる所がありました。そこに、人間を造るときと同じ時に造った特別な木がありました。それに火をつけると、地球全体が朝になり、それを息で消すと、夜になり、やがてけむりが雲になります。また、水で消すと雨になるしくみでした。

ある日、朝にかえようと思ったある男の人が、火の量をまちがえて、地球全体を真っ赤にしてしまいました。その周辺の気温は二十三度から四十度まで変わってしまいました。人々は、それに気がついたので、あわてて、水で消しに行きましたが、気温はまだ変わりません。台の上にいる神様

も気がつきました。気温を下げてやろうと神様がすごく強い風をまきおこし地球に送りました。気温は、だいぶさがりましたが、その風の強さがあまりにも強かったので、天気をあやつる所が消えてしまいました。だから、神様は、二度とこんなことを起こさないように、だれも天気をあやつれなくし、自然に変わるようにしました。

今でも、この神様が台から送った風と同じくらい強い風がおこることがあります。これは神様の台から送られた風のようなので、略して「台風」とよばれています。

作者 黒猫 (小六)

言葉のはじまり

昔、人間がまだ文字や言葉を使えなく、考えていることを相手に伝える手段を知らなかったころのこと。人間は言葉で話さなくても、相手の目を見ただけで相手の気持ちができる、「テレパシー」という力を持っていました。

この能力を持つ前、人間は絵や仕草で大きっぱにやりとりするだけでした。しかし、それだけでは相手に上手く伝えられず、もめ事や争い事が起こるようになりまし。これを見た神様が目を見ただけで相手の気持ちや考えを瞬時に理解できるテレパシーという力を、争い事が減ってみんな平和に暮らしてほしいという願いをこめてさずけました。この力を使うと、今までは時間がかかっていた絵や仕草を使わなくても、お互いの思いや考えがすぐに分かるので、物事などがとても進めやすく、便利なものでした。だから人々はこの力がとても好きになりました。

ところが、このテレパシーという力は、相手の本音がわかってしまったり、かくし事がばれてしまったりして、あちこちでまた争い事やもめ事が起こるようになりました。これを見た神様は、このテレパシーという力を人々からとり上げました。

力をとり上げられた人々は、最初は混乱していましたが、テレパシーをさずかる前に使っていた絵や仕草でやりとりをするようになりました。

ところが、ある日、ある町の住民・絵子が声を出してやりとりができるということに気づきました。その住民は、畑仕事をしていて、しりもちをついて、

「うっ。」

という音が口から出たことから、人は口から音を出せるということに気づきました。他にも、自分で自分をたたいたり、わざとかまどの熱いなべをさわったりするなどの実験をしてみると、口から色々な音を出せるということにも気づきました。そして、自分が山をさして、「あ」と言うと、となり
にいた人も山をさして「あ」と言って通じたということから、人々は、この口から出せる音を使ってコミュニケーションをとれるのではないかと思い
始めました。

そのことをひらめいてから、口から出せる音を使って、コミュニケーションをするようになりました。そして、それは世界各国に広まり、日本では
その音を、発見者の絵子にちなんで、「声」と名づけました。この声を使ったやりとりはどんどん発展し、今でも続いています。また、「目は口ほどに
物を言う」ということわざは、テレパシーを使っていた時の名残かもしれません。

作者 田中大輝 (小五)

へびの一生の始まり

昔々、美しいサクラ山に行きたがるクネークというへびがいました。その時代のへびは足があり歩くことができました。

クネークは食べ物が少ないところに住んでいました。サクラ山は暖かく美味しい果物がたくさんあったのでクネークは行きたがっていたのです。し
かしその中には一つ食べてはいけないサクランボがありました。

クネークは家を出て一日かけてサクラ山に着きました。サクラ山についてクネークは喜び、そこら中にある果物にかぶりつきました。どこ

ろが食べてはいけないサクラランボがあるのにクネークは気が付かずそれにかぶりついてしまいました。サクラ山の神様はおこり、クネークの足を切り、歩けないようにしました。

これ以来、へビは一生地をほうようになりました。

作者 とらなこ (小四)

地震の起源



昔、ギリシア村というところにノッポミという、大きな木を育てる青年がいました。ノッポミの育てている木にはモモリという実ができるのでした。モモリの実は金色で、食感はトロトロしていて、とてもあまい実だと伝えられてきました。しかし、その実は木の高いところにあるため、とどきません。ノッポミはその実をどうにかしてでも取りたいため、いろんな人に意見を聞きました。

一人目に聞いた人は村で一番年上のグックさんでした。グックさんは

「はしごを使って取ったらどうだい？」

と言いました。ノッポミはとても良い案だと思いついてその方法を試してみました。木が10メートルくらいのため、村で一番長い8mのはしごをかけて、村で一番身長の高いモクに取ってもらうことにしました。しかし、あと10センチメートルというところでとどきませんでした。

次に村でゆい一の子どもであるベルギーヌくんに聞きました。すると、

「みんなでかたぐるまをすれば良いじゃん。」

と言いました。ノッポミはあまり良い案ではないと思いましたが、実を取るためなので、たくさんのせの高い人を集めてやってみました。しかし、

今度こんどは高さはとどくものの、不安定ふあんてい過ぎてだめだということが分かりました。

三人目にはユリーカという女の人に話を聞きましたが、ベルギーヌくと同じ案を言ったので、ノッポミは試しませんでした。

ノッポミは一日中村いちちゅうむらを歩き、話を聞く、そして実行じつこうするということを続けました。十五人くらい聞いてまわって一番良い案は、ポルカという青年が言った案でした。その内容は、神様かみさまにたのんで地面じめんをゆらしてもらおう、ということでした。しかし、ノッポミは神様にそんなことを言う勇気ゆうきがありませんでした。そのことをノッポミの姉あね、セルミアに相談そうだんすると、

「わかった。明日あしたの朝あさまで待まっていて。」

と言って家を出でていってしまいました。一人になったノッポミはモモリの実ほんとうは本当にあまいのか、食たべたらどのような気分きぶんになるのかということかんがえながらねむってしまいました。

コンコン、ドンドン、家のドアがはげしくゆれています。ノッポミはあわてて起おきると、急いそいでドアを開あけました。すると、そこにはセルミアと村の人々がいるではありませんか。ノッポミは

「またか。」

とつぶやきました。実は以前じつ いぜんにもセルミアが人々ひとびとを集めてノッポミのやろうとしていることを応おうえんするということをしたのです。ノッポミがあきれていると、グックさんとベルギーヌくんが

「神様のところへ行こう。」

と言いい出でしました。ノッポミは人にさそわれると、ことわれない性せいかくなので、しぶしぶ行くことにしました。

山をこえ、谷たにをこえ、川をこえ、穴あなを通とおり、とても長い道みちを進すすんでいきました。すると、グックさんが立ち止とまり、もしかしたら神に会えないかもしれないが良いか、と聞ききました。みんながうなずくとグックさんはなにやらじゅもんを唱となえはじめました。このじゅもんはグックさんの家だいたいに代々伝たわる神をよべるじゅもんだそうです。すると、真まっ白しろな橋はしが出てきてノッポミはその橋をずんずん歩あきはじめました。

何kmも歩くとたきが流れ落ちる神のきゅうでんに着きました。そのきゅうでんは真っ白で、五階だてくらいの建物でした。屋根の先たんにはギリシア村のマークであるベニテングタケの金色の像が付いていました。

中に入ってみると金色の手すりが付いた、大理石の階だんがある空間が広がっていました。ノッポミとグックさん、そしてセルミアたちはその美しさにあっけにとられていました。すると、大理石の階だんから、白のベールをまとった美しい顔立ちの女の人がおりにきました。この人がギリシア村の神「ミナ」だったのです。ノッポミたちは本当に神と会えて、とてもおどろいてしまいました。

すると、神が話しかけてきました。

「用けんは？」

美しい、おっとりした声でした。ノッポミはこんな自分勝手な願いは言えないと思い、だまってしまいました。そのとき

「モモリの実を落とすために地面をゆらしてください。」

とセルミアが言いました。神は小さくうなずくとたちさってしまいました。みんなは神に見捨てられたと思いますすっかり落ちこんで帰ることにしました。

すると、ドンドンと広い空間に音がひびきました。みんなが音の鳴った方に目を向けると、神が長いぼうのようなもので地面をたたいているではありませんか。みんながあっけにとられて見ていると、神は

「どれくらいゆらせば良いの？」

と聞いてきました。セルミアは笑顔で

「少し、ゆらしてください。」

と言いました。神は

「もしかしたら、人がつまずいたりするひ害が出るかもしれないが良いの？」

と聞きました。それでも実が食べたいセルミアは大丈夫だと言うと神はうなずきました。みんなは良い気分になって笑顔で帰っていきました。

午後三時ごろ、グラグラグラグラ……地面は大きくゆれました。もちろんモモリの木はゆれ、実は落ちました。しかし、そのゆれでノッポミの家はくずれ、火を使っていたベルギーヌくんの家はもえて、グックさんの家は近くの川の波で流されてしまいました。でも少しだけゆらすようにたのんだのに、なぜこんなことになったのか。ノッポミたちが神に願いごとをしいったとき、神はひ害が出ても良いのか聞きました。しかし、それでも良いと言った自己中心的なところにはらを立てていました。そのため、そのいかりがゆれにまで伝わってしまったのです。

年に何回か起きる地震はもしかしたら、神がおこったり、不きげんになったときに起こるのかもしれないね。